

ちー新聞

江原千花が贈る、令和の娯楽新聞

なにかと大変なことの多い世の中ですが、ちー新聞を作ることで「ああ、世の中には、そういう風に生きている人もいるのか」など、癒しをほんの少しでもお届けできたらと、創刊いたしました。本紙のテーマは「心豊か」。ほっこり気分を楽しめる読み物になっていたら嬉しいです。

周囲の魅力的な人をお迎えする対談や、エチカカの文章作品連載、ものづくり愛が溢れるマネージャー母の連載、そして女優・モデル・ダンサーとして活動する私自身の活動報告、演劇を通じた地域活性化を目指す下関リーディングの会の近況などを、ゆるく深く、お届けします。ご期待ください。

今回のゲストは、岩倉万希子さん。高校の同級生ならではの楽しいZOOM対談になりました。音楽の都、ウィーンとの時差は八時間。



おはなししましょ

今回のゲストは……

バイオリニスト 岩倉 万希子 さん



岩倉 高校出てすぐウィーンに来て、もう七年目。大学を卒業して、いま大学院に入ってるけど、やっぱり好きな場所にいると、まだホームシックになったこと無くて。



江原 おおっ。いいね。でもまあ、行った時からそこは心配してないというか。

岩倉 そういう心配はさせないと思うけど、逆にこっちが好きすぎて、一人でエンジョイしてしまってるのが申し訳ない(笑)

江原 ウィーンにいて、一番影響を受けていることは。

岩倉 文化的な部分の影響が大きい。勉強として捉えてた歴史背景が、普通に生活の中で起こってる。例えばブラームスも、自分のおじいちゃんのおじいちゃん……って想像できるくらい、本当にここで生きてた人として感じられる。毎日喋ってるドイツ語も、昔と今では微妙に違うと思うけど、それでも生活の中にその人を見つけられる気がする。作曲家が身近になった。はじめにそれを感じたのは、高校のウィーン修学旅行。雪が降ってたよね。

江原 うんうん。たしか、数年に一度という寒いときで。

岩倉 ザルツブルクに向かう高速道路で、バスに乗ってて。周りが畑みたいで、その中にぼつんと小屋が建ってて。——ああ、こんなに寒いけど、あそこに行ったらきつと暖炉があるんだろなって、ふと想像した。その時ちょうどブラームスのピアノ五重奏曲を勉強してて「あつ、あそこ……」って、曲の一節とすこく結びついた。寒さの中に、ほんのり火がともるような温かさ。ブラームスが感じていた温かさは、こういうものだったのかなあと。



江原 ほー。バスでみんな寝てるるとき、まきちゃんが楽譜めくってる所を見たよな
 岩倉 本当に？ そう、そのとき。
 江原 あのととき一生懸命楽譜を見てたよね。
 岩倉 それまでは「緩やかなビブラートをかけたらここは効果的」みたいにアプローチしてたのが、その時、具体的な想像から「これを表現したいビブラートはどうしたらいいのか」ってアプローチの仕方、曲への近付き方を、すごく考えるようになった。

岩倉 作曲家とか画家の家も沢山残ってて、大事にされてる。ベートーベンが第九を書いたときの家とか。散歩道もあるんだけど、そこで「田園」六番を聴きながら歩くと、本当にその音が聞えてくるの。鳥のさえずりを表したフルートの音、まさにこれだ、って。鳥の鳴き方も日本と違ったりして。作曲の中でこういう音にする意味が分かる。ウィーンに来て、そうやって音楽と結びつくことが多くなった気がする。
 江原 冒頭のドイツ語も、違いを知った後、日々の中で実感することで深まったのかな。
 岩倉 うん。当時のドイツ語で手書きされた遺書を読んだとき、胸が締め付けられた。



ウィーン北部の町、ハイリゲンシュタットにあるベートーベン像。まきちゃん撮影。いろいろ話を聞いていると、お散歩したくなってきました。いつか行ってみたいな。



修学旅行のバスから撮っていました(ち)



ベートーベンの見方も変わった。ただ気難しい人じゃなく、本当はすごく繊細で、耳が聞こえなくなる恐怖とか、人とコミュニケーションできなくなることへの恐怖とか。気難しさにも理由があったのかな、って。
 江原 生き生きと、ひとつずつが。
 岩倉 街に慣れてきたとき、オーストリア帝国を築いたハプスブルク家がああでこうでとか話をして、歴史を知っているからこそ楽しめる部分が増えたことに気付いた。
 江原 自分の一番変わったなと思うところ。
 岩倉 人に会いたいとか、寂しいっていう感情を、本当の意味で知った気がする。それまでは、高校時代は自分の将来のことだけを考えていたから。でも留学して、本当にいろいろな人に助けられてるんだなと感じられた。ビザの問題で困ったときに、オーストリア人の先生が本当に親身になって助けてくれて。それまでは血縁のある人が家族だと思っていたけど、そうじゃない、心の家族みたいに思った。先生でありお父さんのような、自分にとって大きな存在。中高の友達も会ったとき「ああ頑張ろう」って思える、心の故郷のような存在。そういう周囲の人との関わりの中で生きているのを実感するし、その繋がりの中で自分が証明されていく感覚を持つようになった。そこが結構変わったと思う。親戚が増えたような気持ち。

江原 ウィーンのさらに好きになった所は。
 岩倉 晴れた日は、気分が左右されるぐらい嬉しい。というのも、こっちは冬のあいだ空が真っ白で、朝起きてても本当に暗いの。だから日本で桜が満開になったときと同じかそれ以上に、ここでは春の訪れが嬉しい。



ウィーンの写真を沢山送ってくれました。たっぷり40枚も。本当に好きそうです。



岩倉 それから環境問題への意識の高さ。そういう部分でも好きになったな。意外だったのは、シュテファン大聖堂の修復工事。何年もずっと、いつ見ても工事してて、長いなあと思ってたら、実は全部、建設当時のやり方で、石の切り出しからやってた。
 江原 おおーお！
 岩倉 それ聞いて、あっ急かしてごめん、どうぞどうぞと思った。それから、公園が多い。お気に入りのシェーンブルン動物園。自然の中で、動物もののびのびしてる。



江原 ウイーンで好きな料理とか。
 岩倉 素材の味がするものが好き。グ
 ラーシユって煮込み料理も美味しい。
 シュニツツエルもたまに。あとピザ！
 これはイタリアだけど、五回ぐらい行
 く機会があった。小学生の頃から「ピ
 ザを食べるためにイタリアに行きた
 い」って言ってたから、ああ言ってみ
 るもんだな、って思った(笑)

江原 この春、コロナの影響は。
 岩倉 いろんなものが中止になって時
 間が止まったような、冬眠した感じ。
 やっと今、検査してから舞台に乗ると
 か、万が一の為に必ず代役を用意す
 るようになった。今度もソリストさん
 のバックアップに入ってる。レッスンは
 モニター越したと、生の音ではない分
 どうしても変わってくる感じはある。
 江原 難しいよねえ……。
 岩倉 リモート会議は積極的な発言が
 難しかったり、母国語じゃない難しさ
 も感じる。

江原 じゃあ次は、ホットな話題。
 岩倉 バロックバイオリンを習ってる。
 いま皆が知ってる形になる前の古楽器
 弦の部分の羊の腸だったり、顎当てと
 か全部取り払われた、ボディだけの
 楽器。音も全然違う。上手くいけば大
 学の古楽器科にも籍を置いてダブルス
 クールしたいなと。
 江原 えーすごい、聴いてみたい！
 岩倉 結構、音を鳴らすのが難しくて。
 でもシンプルな温かみがある音。勿論

本職はずっと今のバイオリンのまま。
 バロック時代は古楽器で作曲されてる
 から、弾き方が変わってくる。なるべ
 く当時に近づけたいと思って始めたら
 思いのほか面白くて。
 江原 帰ってきた時、いつか弾ける？
 岩倉 バロック的な弾き方とかサウン
 ドを勉強したうえで、バッハのバル
 ティータとかソナタを披露させて貰え
 たら嬉しいな。

江原 これからもウイーンに居たい？
 岩倉 ドイツ語圏、ドイツとかも行っ
 てみたい。チャンスが多い場所。オー
 ストリアは、いろんな場所から流れ着
 く場所のイメージ。ドイツ、イタリア、
 ハンガリーからも。交差点のような所
 故郷にするならウイーンだね。不思議
 なもので、留学したての頃に、ウイー
 ンの空港に着いたとき、「ただいま」
 って思ったんだよね。

江原 まきちゃんの中の必要なものが、
 ウイーンにあるんだね。
 岩倉 本当にそう。先生からは「長期
 旅行者にはなるなよ」って言われてる
 から、これから本当の意味で自立でき
 る場所を、もう少し時間が必要だけど
 うも、バロックバイオリンもあるし(笑)
 考えて決めていくことになると思う。

江原 いつか、まきちゃんが言ってく
 る「勢いって大事よね」を覚えてる。
 岩倉 確かにあたし言いそう(笑)そう
 だね。バイオリンに関しての勢いは、
 これからも大切にしていきたいな。

岩倉万希子 (いわくら まきこ)
 一九九五年北九州出身。梅光学院高等学
 校音楽科卒業。ウイーン市立芸術音楽私
 立大学首席卒業。

第六一・六四・六五・六七回全日
 本学生音楽コンクール福岡・北九州大会
 第一位、全国大会入賞。第六一回南日本
 音楽コンクール弦楽部門最優秀賞・グラ
 ンプリ受賞。第一回Atrantia
 Corst国際音楽祭第三位(ポルトガ
 ル)。第一八回エウテルペ国際音楽コン
 クール第一位(イタリア)。第五回ヴァー
 サ・プシホダ国際音楽コンクール第一位
 及びグランプリ受賞(チェコ)。第五回バ
 スコ・アバジエフ国際ヴァイオリンコン
 クール第一位(ブルガリア)。ウイーン音
 楽セミナー主催デヒラーコンクール二
 〇二〇第一位(オーストリア)。二〇一七
 年イタリアのアゾロとフェルトレーにて
 リサイタルを行い、演奏会主催Asol
 o Martiné文化協会よりベスト
 パフォーマンス聴衆賞受賞。これまでに、
 九州交響楽団、ブラチスラバ交響楽団、
 北九州グランフィールハーモニー管弦楽団
 と共演。平成二五年度、平成二八年度北
 九州市文化振興基金杉浦奨学生。平成三
 一年度、第五一回北九州市民文化奨励賞
 受賞。

これまでに篠崎美樹、篠崎永育、篠崎史
 紀、トーマス・クリスティアン各氏に師
 事。アレキサンダー・アレンコフ氏のマ
 スタークラス受講。現在、ウイーン市立
 芸術音楽私立大学大学院在籍。ボリス・
 プロフツィン氏に師事。



●今後の演奏予定
 十月に、北九州で
 二件、演奏を予定し
 ているそうです。

☆演奏会の頃には世
 情も落ち着いて、無
 事に帰国できるよう
 願っています。
 世界中の人たちの
 心を掴んで離さない
 演奏。益々輝きを増
 す岩倉万希子さんの
 演奏、ぜひいつか、
 生でお聴きください。

ちーさな
column



まきちゃんとの
 対談という
 かテレビ電話、本
 当に楽しかったな
 ……。
 忙しいのに、久し
 ぶりだからって時間
 も押して、色んな話
 を聞かせてくれました。
 心の故郷、嬉しいな。

演公劇演 催主花千原江 回三第

グオロノモ



おまらに、どれだけ奥持が、
わかっていたんだらう……

ただ、あなたならば、
どんな奥持をしたんだらう。

妻親寄上演らいぶ放送
日時 令和三年二月四日(木)
午後一時開演(十五分前同席)
山口県内劇場より生配信
視聴料全 志千円

(第三回主催公演のフライヤー)

今回は作品を読んだときに、竹久夢二の世界！と感じた事から、迷わず竹久夢二の作品から選びました。チラシのロゴは戦前っぽさを出したくて意図的に右からにしたのですが、多くの方に「グオロノモ」ってどういう意味？と聞かれてしまいました(苦笑)

そして、画像ではわからないのですが、今回のチラシはわら半紙印刷なのです。真っ白ではなく、少しくすんだ柔らかな手触りがお気に入りポイントです。

衣装にはとても悩みました。台本に「派手なセル」という記述があり、当時の「派手」の解釈、色味や柄、何となくイメージを持って探してみたいものの、これだ！と思う着物は、やはり時代物。千花にはとても着ることのできない着丈、裾丈……昔の人って小さかったんだなあとしみじみ思いました。それでも、諦めずにあっちで探し、こっちで探し、悩みながらたどり着いたのが、今回の衣装の着物です。



ついでに、新聞切り抜きのようなミニサイズ(名刺大)のチラシも作りました。やはり、わら半紙のチラシは珍しいのか、皆さん「わあ〜」と手に取って見てくださったので、これはなかなか良いアイデアだったと自画自賛しています。



オフィスマネージャー
江原美千代

江原千花の母。裁縫や工作など手仕事好き。美術・音楽・服飾・風景。とにかく美しいものが好き。HP更新担当。

ちか・いいおふいす
Chika. E Office もっ
愛を込めて……

古き時代に思いをはせて

令和三年二月四日、第三回主催公演として「モノログ」を無観客上演らるいぶ放送しました。第一回の「父と暮せば」よりも、更に前の時代のお話で、時代は昭和初期です。私はマネージャーでありつつ、チラシ作成や衣装・小道具も担当しているので、作品が決まってもまず最初にそのものが、その時代を調べる事。どんな服を着ていたのか、街の風景、流行っていたもの、住宅事情、家財道具。出来る限り作品の時代感を大切にチラシ作成にとりかかります。

江原千花
観察日誌

「モノログ」から一転、ART展覧会でのパフォーマンス創作の様子から。テーブルに乗ったりもぐったり、千花幼少期に同じ風景を見た記憶が……(笑)



帯はオレンジ地に白・黒・金で花刺繍が施された祖母の時代物。半襟も昔の着物をほどいた端切れです。

我が家には、いつか衣装で使えるかもと着物や洋服、道具類が山のように保管されています。そのまま使えるものもあれば、素材として活かされるものも。古いながらも大切に使われたものにはどこか温もりがあつて、再利用は環境にも優しい。そんなエコな工夫も舞台づくりの楽しみなのです。

